

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第 52 号

無料

特集
理想のオリンピックとは？



スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2	第52号を発刊するにあたり	長田 渚左
	■特集■	
	理想のオリンピックとは？	
4	日常をとりもどすオリンピック—— 白井 健三	取材・構成 長田 渚左
8	聖火は「人知れず」燃えていた	文・満園 文博
12	「参加することに意義がある」とは？	文・津田 桂
16	近代オリンピックは平和に貢献してきたか？	文・具志堅 幸司
20	今こそ理念に原点回帰を	文・川本 峰男
24	多様性をもたらす『黒船』	文・溝口 紀子
28	自らのルーツをありのままに誇る	文・木村 元彦
32	根本問題を解決して素晴らしさを残す方法	文・玉木 正之
36	夏冬の競技数は正、究極の理想は国籍の壁も越えたオリパラ融合	文・田村 崇仁
40	アスリートの活躍と市民の交流こそ理想のオリンピック	文・真田 久
44	オリンピックのユートピアを考える	文・友添 秀則
48	バックナンバーのご案内	

【表紙イラスト】 南 伸坊

ご好評いただいています、夢劇場『馬』はお休みしました。

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第52号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



東京オリンピックが閉幕した。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大で、開催反対の国内世論が一時8割を超えするという懐疑的な空気の中での開催だった。

感染への懸念から、ほとんどの試合が無観客。多くの矛盾を抱えたまま、過去に例のない緊張感を抱えた日々となった。

そんな中、世界中から集まった1万1000人のアスリートに心から敬意を表したい。大会期間中、彼ら、彼女らはインタビューで、こう言った。

「この大会を開催してくれた関係者に心から感謝したい」その言葉を耳にするたびに、それぞれが自らの力を最大限に発揮してほしいと願った。

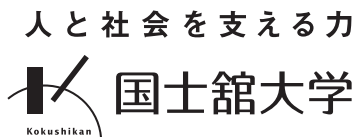
史上最多33競技339種目を終えた今、みんな無

事に母国に帰ったのだろうか、元気なのだろうか、と気にかかる。

1年延期が決定して以降、開催の是非が問われる中、57年前の東京大会以上に多くの人がオリンピックの開催意義を深く考えたのではないだろうか。今大会中にサッカー女子のなでしこジャパンをはじめ幾度となく選手自ら差別に抗議を表すシーンが見られたことも印象深かった。

そこで52号の特集では「理想のオリンピックとは？」というテーマで11人の方々に問い掛けてみた。インタビューで最初に登場する男子体操の白井健三氏以外の方々には、それぞれの意見や思いを執筆していただいた。元トップ選手、研究者、ジャーナリスト、評論家等々、肩書や立場は異なるが「心からスポーツを愛してやまない」という点では共通している。だから厳しい意見にも、ほとぼし迸る熱が感じられる。今後のオリンピックを考える上で、参考にしていただけると幸いです。

ご協賛およびご協力企業・団体



立ちどまらない保険。



三井住友海上

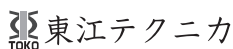


公益財団法人
住友生命健康財団



株式会社東美物流

日本ハンドボールリーグ機構



(順不同)

日常をとりもどすオリンピック

白井 健三

取材・構成 長田渚左
写真 日本体育大学



印象に残ったオリンピック

2004年アテネ大会

深夜、ぐっすり眠っていたらテレビ観戦していた両親が大喜びで起こしに来たんです。それが28年ぶりの体操日本男子団体総合優勝でした。僕はアトランタ大会が行われた1996年生まれで、アテネ大会当時は7歳でした。その時に「オリンピック」という大会名を初めて覚えたのです。

白井 健三(しらい けんぞう)

1996(平8)年、神奈川県横浜生まれ。3歳から体操を始め、小3の時に両親が創設した「鶴見ジュニア体操クラブ」で本格的に競技を開始。2013年世界選手権のゆか運動で男子史上最年少の17歳1カ月で金メダル獲得。16年リオデジャネイロ五輪体操男子団体総合で金メダル、跳馬で銅メダル。ゆか運動で3つ、跳馬で3つの新技を主要国際大会で成功させ、国際体操連盟により「シライ」の名を含む名称がつけられた。21年6月に現役を引退。現在、母校日体大の体操競技部コーチ

——白井さんにとって理想のオリンピックとは？

白井 アスリートを国民が全力で応援できる大会であってほしいと思っています。出場する選手が後ろめたい気持ちになったり、何だか悪者扱いのように感じたり、世の中の常識からずれていると見られるのはおかしいし、そうあってほしくはないです。応援する人たちに、選手の背中を押すような気持ちで声援を送れば、勇気や感動を得られるかもしれないという期待を感じてもらいたいですね。

アスリートは自分たちに与えられた場で精一杯やるだけです。開催の是非を問われる役回りではありません。周囲の人的サポートをしっかり受けて、堂々と試合をしたい。今のご時世では、それが理想のようには思います。

——2016年リオデジャネイロ・オリンピックの前には3度も世界選手権にも出場しています。オリンピックと世界選手権は違いますか。

白井 どちらも大きな大会ではありますが、実感と

して2つの大会はまったく別物でした。リオ大会では、少し大げさに聞こえるかもしれませんが、僕はゆかの演技台に上がったとき、会場の何万人という人々の歓声で建物が壊れるのではないかと、思ってたほどでした。巨大スピーカーの脇にしていると大音響で微振動を感じることがあると思いますが、ちょうどあんな感じ。会場の歓声が一丸となって渦になる。空気がビリビリして凄かったです。世界選手権のお客様は体操を見に来る。一方でオリンピックの体操会場は、体操の枠を越えてオリンピックを見に来るお客様なんです。だから温度感が異なる。体操を見慣れた人たちには別にどうってことのない細かなことにも、一つ一つ「ワァー!」と、観客のうねるような興奮を感じました。日本からの応援団も沢山の日の丸を振って、着物で正装していたり……。

——オリンピックは特別な味わいだつたのですね。

白井 リオに行く前は、2年前にサッカーのワールドカップを開催したことで、ブラジルは財政的に苦

しくなり、市民はオリンピックを歓迎していないと聞いていたし、スラムの治安がとても悪くて危険だとか、マイナスイメージばかりが伝えられて不安でした。ところが行ってみると、事前に伝えられていたものと、こんなに違うもののかと驚きました。地元の人たちは親切で明るく、オリンピックのＩＤカードを見せると誰もが素直に喜んでくれるし、税関の人も「よく来た! 頑張ってくれよ!」とニコニコして迎えてくれた。

もちろん自分もオリンピック選手ですけど、選手村では一人の観客でもあるわけです。目の前に陸上のウサイン・ボルトがいたり、テニスのジョコビッチが歩いていたり、卓球で金メダルを獲った丁寧テイニンにも会えた。テレビでしか見たことのない大スターたちと一緒にいるという夢を見ているような気分も味わいました。「ああ、これがオリンピックなんだ」と……凄く嬉しかったです。僕にとつて航平さん（内村）はとても身近な人ですけど、海外の人から見た

——今回はその素晴らしい交わり、交流が極めて限定的になってしまいましたが……。

東京大会は開催そのものに反対や懸念の声がある

それは選手同士という立場だけではなくて、見る人も変化するチャンスを秘めていると思います。何かをするときに100%の賛同は得られないものだと思います。ですが、この東京大会で選手の懸命なパフォーマンスを受け止めてほしい。今回の大会に出場する選手はオリンピックに出場したいという従来の夢に加えて、コロナ禍で国を代表する特殊な責任のようなものもあるような気がして、何だか気の毒なんです。僕が出場した前回のリオ大会では、何の邪念もなくて体操だけに集中すれば良かったただでしたから。

——リオ大会の男子体操団体メンバーで、東京大会に出場するのは内村航平選手だけです。年齢差はあ

りますが、白井さんの体操は内村さんにも影響を与えたと思うのですが……。

白井 体操には他の競技と根本的に違う点があります。競技会では得点で競ってはいませんが、直接、人と争っているわけではないんです。他の競技、例えばレスリングや柔道、球技などは相手の弱点を研究してそこにつけ込む。でも体操は他の選手の中に良い点を見つけると、そこに追いつこうとする。例えば高得点が出ない選手にも、ある部分には凄くうまい点があったりします。つまり成績順とは別のところに正解があったりする。6種類もの器具があり、そこに数十種類もの技がある。加えて人の身体には特性やらクセが絡み合っているから、まず同じキャラにはならないし、互いを見るときに良い点を発見しようとするまなざしが強いですから、体操は互いのリスペクトも生まれやすい気がします。

——俗に体操で一流になるには約10万時間が必要だという言い方もされますが。

白井 少なくとも僕は自分にしかできないものを発表することだけをやってきました。

——結果として体操史に『シライ』と名前の付いた技を6つも残されました。

白井 はい。今後、ゆかや跳馬のシライを実施する教え子が誕生してほしいです。

今回の大会に多くの反対意見があることは承知しています。でも、こう考えられないでしょうか。ある人にとつても凄く大切にしている仕事があると思いますね。アスリートにとつてその大切な仕事のプレゼンテーションの場がオリンピックなんです。人間にはその人その人の特性があります。出場する選手を否定することは、その選手の人生を否定することだと思ふのです。自分とは異なる人間がいることも分かってほしいのです。コロナ禍での異例づくめの状況の中で、どうやったら日常を取り戻せるか。その第一歩として東京大会があると信じています。

聖火は「人知れず」燃えていた

文・満園 文博

印象に残ったオリンピック

ソウル、バルセロナ、アトランタの3つの夏季五輪、加えて冬季のアルベールビル五輪を取材した。いずれの五輪も、忘れがたい思い出として残っているが、特に88年ソウルで私たち中日新聞取材団が、陸上男子100mのベン・ジョンソン(カナダ)の「禁止薬物失格」をスクープしたことは忘れがたい。ただ、どこを探しても、当時の写真がない。というわけで、取材の合間に仲間とぐつろぐ92年バルセロナの記者席を(手前が筆者)。



満園 文博(みつぞの・ふみひろ)

1950(昭和25)年、鹿児島県生まれ。鹿児島大学卒業。中学校、高校、大学と陸上部に所属。出版社勤務を経て、85年に中日新聞社に入社。陸上競技を中心に主に一般スポーツを担当。オリンピック4大会を現地で取材。スポーツ報道部長、編集委員を経て同社を退社。著書に『オリンピック雑学150連発』(文春文庫)『オリンピックトリビア!——涙と笑いのエピソード』(新潮文庫)『小出義雄 夢に駆ける』(小学館文庫)など。スポーツジャーナリスト、専修大学講師

「なあ、今度の東京オリンピック、一緒に見ようや」。東京・国立競技場からは、そう遠くない新宿の行きつけの飲み屋で、夢を語っていた坂井義則さんが、病気のため、69歳で天国へと旅立ったのは、2014(平成26)年9月10日のことだった。生きていたら76歳。

1964(昭和39)年10月10日、雲ひとつない秋晴れ。当時の国立競技場、19歳の早稲田大学1年生(競走部)坂井さんは、163の階段を駆け上り、グラウンドから31メートルの高さにある聖火台に点火した。今から57年前に開かれた、64年東京オリンピック開会式の話である。

この大役には大義も名分もあった。坂井さんは、1945(昭和20)年8月6日生まれ。ヒロシマに、第2次世界大戦の終焉を決定づける原爆が投下されたまさにその日、同じ広島県内の三次市で生を受けた人だった。400メートルランナーとして、その東京五輪の強化選手に選ばれながら、代表切符を逃

した人である。そして、めぐってきいたのが、この大役だった。

7万5000人で埋まったスタンド。緑のフィールドは、当時93の国と地域からやって来た選手団で埋まっていた。色とりどりの各国選手団の旗やコスチュームが「聖火台から見たら、まるで絨毯じゅうたんのようだったなあ」「この美しさこそが、オリンピックだ、平和だ、と思ったね」

あの、美味しかった新宿のビールの日から月日は流れた。坂井さんが足跡を残し、僕もたった一度だけ競技会に出場し、その後、取材のため数十年も通った当時の国立競技場は姿を変え、いま、新たな国立競技場がそびえている。

『迷文句』とレガシー

そして今——。乱暴な言い方だが、本当に、本当の2020東京オリンピックは行われたのか?! 正直に告白すれば、この原稿は、T O K Y O 2 0 2 0

の開幕を目前に書いた。断言するには無理があるが、少なくとも「大きな要素」を欠きながら挙行されたことははっきりしている。「最高の演者たち」と「最高の観衆」——オリンピックは、どちらか一方が欠けたら成立しない、というのが、不肖僕の特論である。神輿を担ぐ者、踊り手がいて、それを群衆が囲むようにしてお祭りは盛り上がる。やんやの喝采かけ声、拍手のない檜舞台は、お祭りの主役たちに失礼である、というのも、僕の特論である。しかし、現実に4年（実際は5年）に二度の世界のお祭りが、無観客の舞台で挙行されたのだ。もうお分かりだろうが、僕は「延期論」者だった。新聞のコラムを中心に、延期の模索論を唱えたが、それは犬の遠吠えに終わった。

一方で、競技の道を選び、技を磨き、心を鍛え、逆境の時代に立ち向かったアスリートたちの「強さ」には感服する。ごく一部の地域を除く「無観客」の巨大スタジアム、各競技場で、力一杯に限界に挑ん

だアスリートには本当に頭が下がる。世界が新型コロナウイルスとの闘いに明け暮れ、いつしか、アスリート・ファーストへの尊厳が希薄になった中で「オリンピックの存在意義」とも戦ったであろうオリンピックの勇気を讃えたい。

白血病を克服、病床から立ち上がり、単独種目ではなかったが、リレーメンバーとして五輪切符を手にした女子大学生、競泳の池江璃花子に、オリンピックの女神は優しかった。「頑張ります。見ていてください」と、彼女は言った。メッセージには、難病と闘う人たちへの励ましの思いも込められていた。

うつ状態に悩まされながら、女子テニスの大坂なおみは、日本代表として東京五輪への出場を決めた。父親がハイチ系米国人、母親が日本人の彼女は、3歳まで大阪で過ごした後、海を渡り、米国で成人した。日本語はたどたどしいが、選んだ国籍は「日本」だった。うつ症状の経過が心配される中、彼女が下した結論は「東京オリンピックには出場します」だった。

た。「なぜなら、日本は私の生まれた国。それに、大事な母の国だから」と、大和撫子の顔をのぞかせていた。日本だけではない。代表たちには、みんなそれぞれに「顔」があつて、ヒストリーがあつただろう。「延期」を主張しながら、一方で「参加者」にエールを送った僕は、確かに二枚舌である。言い訳がましいが、それほど、コロナ禍は人々の心、思考を引っかき回し、苦汁を飲ませた。東京2020が、五輪史だけではない「世界史」に永久に遺されるのは間違いない。前総理が言った「人類が新型コロナウイルスに打ち勝った証として、安心、安全なオリンピックを開催する」もまた、「迷文句」として、レガシーになるのだろう。

晴れ舞台と“人知れず”

はるばるアテネから運ばれ、多くの人の目に触れないまま、1年間保管されていた聖火は消え入りそうになりながら全国をめぐり、東京にたどり着いた。

「復興五輪」を掲げ、2011年3・11大震災の大被災地、福島を、同じ3月の25日に出発した聖火は、そこから46の道府県をリレーされた。多くの地方では、リレーとは名ばかりの、走ることなく、あるいは少し小走り、あるいは歩いて「次走者」に託す「トーチ・トス」を余儀なくされた。はじめの頃は、違和感を覚えたこのセレモニーだが、やがて「無観客の晴れ舞台」になることが日常的になるほどになっていった。

果たして、皮肉にも、政府によって4度目の緊急事態宣言が発令されるのに遭わせるように、7月、聖火は主開催地・東京に入り、リレーが始まった。そしてそれは、やはり、本来決められた目抜き通りから外れた場所で行われ、聖火は「無観客の晴れ舞台」のさみしい主役になった。

緊急事態宣言が、一時取り払われた6月のある日、僕は東京・下町にある、なじみの居酒屋ののれんをくぐった。創業74年の老舗。客の顔もそこそこには

知っている。店内のテレビが、少しばかり聖火リレーのシーンを映した。カウンターで隣になった中年男に声を掛ける。「もうすぐ、東京にもやって来るねえ」。男は仏頂面でボソツと返した。「何が？ 何かやって来るんですか？」。コロナへの対応に追われるうちに、オリンピックの存在が薄くなった人は多かつたのだ。

私ごとだが、細々と我流のオリンピック研究を続け、3冊の「オリンピック本」を出している。新聞記者時代に、4度のオリンピック現地取材のチャンスにも恵まれた。当然だが、スポーツそのものの現場取材から、開催地の人々、生活の営みまでも取材したものである。そんな経験から、どうも、このたびの東京五輪は「人知れず」がテーマになって、後世に語り継がれるような気がしてならない。

「なあ、東京オリンピック一緒に見ようや」——。そう言っていた坂井さんは、コロナ襲来を知らずに逝った。もし生きていたら、何を話したのだろう。

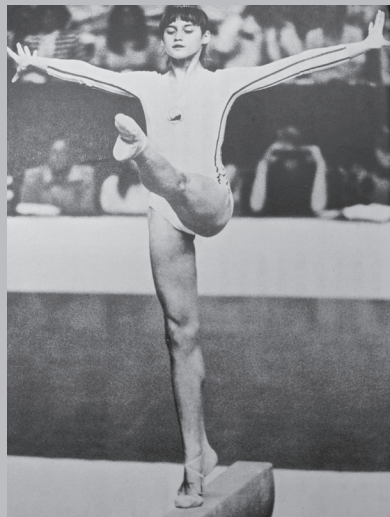
「参加することに 意義がある」とは？

文・津田 桂

印象に残ったオリンピック

1976年モントリオール大会

印象に残っているのは、モントリオール大会だけ。ルーマニアのコマネチ選手が10点を連発し、日本の男子団体がソ連との接戦の末金メダルを獲得した。観るものの全てが感動的で、これを機に現実のものとしてオリンピックを目指した。



津田(旧姓:内田) 桂(つだ・かつら)

1965(昭40)年、東京都三鷹市生まれ。8歳から体操を始め、中学3年時に全日本中学生大会で優勝。國學院高校1年でモスクワ五輪代表となるが、日本のボイコットで出場叶わず。世界選手権、アジア大会に出場後、高校卒業と同時に現役引退。当時の女子体操を支え続けた全日本チャンピオンの笹田(旧姓:加納)弥生さん(2019年に逝去)は、小学校から高校までの先輩にあたる。現在は神奈川県相模原市在住。小学校非常勤講師を務めながら、地域の健康体操などに携わる

オリンピックは消えた

ボイコットとなつたモスクワオリンピックの3年後、「ロスをめぎしたら」の周囲の声を「オリンピックなんてあつさりとなくなつてしまふのだから、大した大会じゃない」という冷めた気持ちで聞いていました。それは、自分に起こつた悲しいできごとで傷つかないようにするため、無意識にとつていた思考策だったのかもしれませんが。

8歳から体操を始めました。いろいろな技ができたり、憧れの選手の真似をする体操ごっこをしたりするのが楽しくて、練習のない日も体育館に通うほど体操が好きでした。まだまだうまくもない頃から、「将来は、オリンピック選手になるのよ」と、先生に幾度となく笑顔で言われていました。そのためか「オリンピックは最高の舞台。オリンピックに行きたい」という意識が、自然と自分の中に蓄積されたのだと思います。本格的に体操競技に取り組むようになって

てからはなお一層「オリンピックに出ること」が、目指すべき最高のものとなりました。

『参加することに意義がある』という言葉からも、特別な意味をもつ大会なのだということを子どもながらに感じていた気がします。

高校1年で代表の座を得たモスクワ大会は、その夢を手に入れた僅か半月後に、日本のボイコットによってあつけなくなりました。そして、その3年後、オリンピックに対しての憧れを無くした状態で、高校卒業と同時に体操競技を引退しました。

経験と反響

4年ごとに開催されるオリンピックは、どんどんと盛大になつていき、大会の様子だけでなく、選手たちの活躍や関係者たちの逸話までもが必要以上に報道されるようになりました。また、商業主義の風潮も回を重ねるごとに強くなりました。でもそれとは裏腹に、私のオリンピックに対する思いは、益々

ネガティブなものになっていきました。オリンピックの映像を目にすることは避けたかつたし、素直に応援できない自分に嫌悪感が募っていくばかりだったからだと思います。ただ、「オリンピックが人々に与える力はものすごい。なぜこうまでも人々の心を動かすのだろうか」といつも感じていたことは事実です。

『東京2020』に向き合う自信がなく戸惑っていた2017年、モスクワのチームメイトと初めてオリンピックに対する気持ちを打ち明け合いました。苦しんでいたのは自分だけではなかったことがわかり、ボイコットを経験した私たちだからこそできることをしていこうと考えるようになりました。そして、日本スポーツ学会をはじめ、多くの方々のお力をいただき、平和の祭典としてのオリンピック関連事業にも関わりました。

モスクワのことを知っている人は多くありませんでしたが、たくさんの方が「そんなことがあったな

んて知らなかった」と驚き、そして共感してくれました。新聞などに取り上げてもらったり、神奈川県
の聖火ランナーに選ばれたりした時の反響が想像以上
だったことに、ここでも「オリンピックが人々に
与える力は大きい」と強く感じました。

オリンピックの精神と言われる『参加することに
意義がある』は、次第に耳にすることが少なくなっ
たように思います。近年では、メダルの数をカウ
ントし、それを他国と比べ、多い少ないと議論するよ
うにまでなりました。本来、選手自身の競争であり、
国家間の競争ではないはずなのに、いつの間にか『参
加するだけでは意義がないもの』になってしまった
かのようでもありました。

コロナのために、オリンピックの姿も大きく変わ
ろうとしており、なおかつ今もまだ不安定な状況で
す。この東京大会にかけてきた選手たちのことを思
うと、本当にかわいそうでなりません。不安と戦い
ながら、自分のできることに精一杯取り組んでいる

選手たちは、もはやオリンピックに出場するよりも
価値あるレベルに達しているのではないかと思いま
す。『参加することに意義がある』は、オリンピック
を目指す過程を言っているからなのだと、今の選手
たちの姿を重ねて強く感じるようになりました。も
し出場できなかったとしても、これまでやってきた
ことに大きな価値があり、それは、生涯を支えるも
のになると心から思います。

これからは、予想をしていなかったことに対応し
ていく世の中になることは誰もが感じています。オ
リンピックを目指すことはとても素晴らしいけれど、
先はどうなるかわかりません。出場することを最大
の目標にするよりも、自らの取り組み方やその過程
に誇りをもてることが、一番大切であるように思う
のです。

友情と敬意

昔と比べて今は外国への往来が楽になりました。

「参加することに意義がある」とは？

外国の文化に触れたり、外国の人々と交流したりすることも決して難しいことはありません。けれどもオリンピックには、それでしか果たせない大きな力があるのではないのでしょうか。

思いつく光景があります。私が出場した1982年にニューデリーで開催されたアジア大会。表彰式を待つ間に、韓国の選手と北朝鮮の選手がお互いの健闘を称え、抱き合つて涙していました。安易に近づけないような重みとともに、スポーツを通じた友好と相手への敬意がそこにありました。オリンピックとなれば、多くの人々が、多くの場で、そのような光景を共有することができるでしょう。

皆が一堂に会して世界中のことを大切に考える場となるならば、こんなに素晴らしいことはないと思うのです。

この東京大会は、コロナ感染拡大の不安はもとより、紛争や内戦など明日の命を心配する最中にある国もあり、単純に『平和の祭典』と片づけ難いです。

しかし、この東京大会が世界中の人々にこれからのオリンピックを考える機会となることは間違いないでしょう。

厳しい状況にある国々や弱い立場の人々が少しでも穏やかな方向へと向かえるように、今後は、世の中のことを思いやる平和の祭典として、オリンピックが大きな役割を果たしてほしいと思います。

『参加することに意義がある』を『その過程に大きな意味がある』と捉え、『オリンピックは、スポーツを通し、世界の国々の平和を皆で考えていく場』となつてほしいと願います。



近代オリンピックは平和に貢献してきたか？

文・具志堅 幸司

印象に残ったオリンピック

1976年モントリオール大会の体操競技

1976年当時、体操のエースであった笠松茂選手が大会直前に虫垂炎を患い補欠の五十嵐久人選手がメンバーに入り競技が進んだ。団体自由演技の1種目目のゆか運動の終末技で藤本俊選手が左膝の靱帯を損傷、3種目目のつり輪の着地でさらに悪化し、この時点でドクターストップがかかる。日本は4種目目以降5人で戦い、ソ連（現ロシア）に逆転し、世界選手権を含めV10（20年連続）世界の王座を君臨した。



具志堅 幸司（ぐしけん・こうじ）

1956（昭和31）年、大阪市大正区生まれ。大正中央中で体操競技を始める。清風高3年時の高校総体で個人総合、団体総合優勝。日体大2年時に当時史上最年少で代表強化選手入り。79年世界選手権に初出場。団体銀、あん馬銅メダル。80年モスクワ五輪代表。全日本選手権個人総合優勝4回（80～82年、84年）。84年ロス五輪では個人総合、つり輪で金メダルのほか団体、跳馬で銀、鉄棒で銅メダルを獲得。2005年、紫綬褒章受章。現在、日本体育大学教授、日本体操協会副会長

近代オリンピックが開催されてから今年で125年を迎える。

その間、冬季五輪を含め合計5回の中止があった。この5回の中止はいずれも戦争がその理由である。私が出場する予定であった第22回モスクワ大会は旧ソビエト連邦がアフガニスタンを軍事侵攻したという理由でアメリカがボイコットを表明し日本を含む西側諸国が「右へ倣え」と次々と不参加を表明した。続く第23回ロサンゼルス大会、こんどは東側諸国が参加せず、いずれも片翼五輪で終わってしまった。つまり、人類はいつの時代も戦争と対峙しながら歩んできたことになる。私は「スポーツに政治が介入することは断じて許せない」と思うがはたして政治が介入しないオリンピックの開催は可能だろうか？

モスクワ五輪ボイコットを考えてみても、アメリカのカーター大統領に屈した日本政府、日本政府に屈した体育協会（現JOC）という図式が浮かび上がる。

近代オリンピックの父と呼ばれるピエール・ド・クーベルタン男爵は「スポーツを通じて心身を向上させ、さらには文化、国籍など様々な差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもつて理解しあうことで、平和でよりよい社会の実現に貢献する」ということを提唱している。

古代オリンピック時代も、休戦協定（エケケイリア）が結ばれ、祭典期間の5日間を含め前後3ヵ月間は国内外のすべての争いごとの禁止や刑の執行停止などが徹底されていたのである。つまり、「オリンピック休戦」という言葉は、「スポーツの持つ力で紛争のない世界の実現を目指す」活動のことである。こうしている今も世界のどこかで戦争やテロが続いているという現実を直視しなければならない。

はたしてこの先人類は戦争やテロのない時代を迎えることができるのか？ これまでの歴史に鑑みて、その答えは「NO」と言わざるを得ない。しかしその一方オリンピックは平和に貢献するという理念は、

私たちが決して忘れてはならない重要なことであろう。どれだけ現実が厳しくとも、世界の平和と繁栄を諦めることなくオリンピックを開催するところに意義があると思う。

商業主義に染まった五輪

オリンピックの商業化のスタートは私が出場した第23回ロサンゼルス五輪（1984）からであると言われている。前大会のモスクワ大会（1980）は社会主義国の開催で国の権威を示す大会でもあり、国が全面的に支援した大会であった。モスクワ大会の前大会、モントリオール五輪（1976）は大幅な赤字で大会を終了している。そしてロス五輪と続いていくのであるが、この大会で、組織委員長を務めたのがピーター・ユベロス氏である。その手腕は公式スポンサーを1業種1社に絞り、業界内の競争意識をおおること、スポンサー料を上げたとにであった。また、この大会の一番の収入源は何と

いつでもテレビの放映料で、当時2億8700万ドルの放映料を得ることに成功したと言われている。

このロス五輪後、「オリンピックは儲かる」に繋がりを、今や「最大の広告媒体」と繋がった。莫大な放映権料やスポンサー料がIOCの懐を潤し、競技自体にまで影響を及ぼすという事態に繋がっていったのである。

私が体操男子監督を務めた北京五輪（2008）は体操の団体と個人総合、並びに水泳は異例の午前の決勝であった。

本来多くの選手がパフォーマンスを最大限発揮できるのは午後の時間帯であり日頃の練習も午後には重点をおいている。この体操と水泳はアメリカでも人気スポーツであり北米地域でのゴールデンタイムとなる北京の午前中の決勝実施をNBCが要求したのが事の始まりであった。国際水連や一部選手は反対していたが、北京五輪に約9億ドルの放映権料を支払うとされるNBC側の要求をIOCがのむ形と

なった。お金の力には正論は通じないことをこの一件は物語っている。

私が選手時代であった70年代までは「アマチュア規定」という存在が大きく、基本的にはスポーツでお金を稼ぐことは許されておらず、また「プロ」はオリンピックから排除されていた時代であった。一方で旧社会主義国を中心に国から生活を保証されている「ステート・アマ」の存在があり、不公平という理由、また前述の84年のロス五輪が完全民営化がもたらした収入で成功した大会となったことなどから、ほとんどのスポーツでプロ化が進み現在に至っている。一方IOCがプロの選手やチームのオリンピック参加を奨励していることもプロ、アマの垣根を取っ払うことに繋がり背中を押した形となった。

今やオリンピックはアスリートだけではなくメディアや大企業にとっても一大イベントとなり、現在に至っている。

この商業主義のオリンピックは是か非か議論をし

ていかなければとんでもない方向に進むのではないかと、私は危惧している。いやすでに進んでおり、もはや後戻りができない状態にあるのかもしれない。どのスポーツ競技も選手が主役であることを私たちは忘れてはならない。真の「選手センター」とは何か、今後、商業主義と合わせ議論の対象にしなければならぬであろう。

コロナ禍におけるオリンピック

中華人民共和国武漢市で発見された新型コロナウイルスはオリンピックの歴史上類を見ない開催の「延期」へと追いやった。そして、オリンピック開催の是非や、ボランティアの問題、また、観客動員数の決定や受け入れ態勢の問題など様々な問題を残しながら現在に至っている。

本来オリンピックは「より速く」「より高く」「より強く」と標語に示される一方、オリンピックムーブメントに示されているように平和を追求する場で

もある。しかし、コロナ禍の影響で、選手らは原則、宿泊場、競技会場の行き来しできない。他国の選手たちとの交流は許されない。IOCや海外メディアの関係者も、海外からの入国・帰国者の待機期間に当たる14日間は、活動計画書を提出し認められた場所だけ訪問する。ということである。もし違反すれば内容に応じ、大会からの除外、制裁金などの措置をとるという。まさにこのコロナ禍は世界中の選手、関係者、観客における友好の場やボランティアの活動も根こそぎ奪ってしまったことになり、オリンピック憲章では、「友情、連帯感、フェアプレー」の精神とともに相互理解が求められているが、それらを育むそのものが禁止されている。まさに人類が初めて経験する事柄に対峙しながら進めなければならぬ。選手たちは新型コロナウイルスの猛威と闘いながら、心身の健康維持と限られた環境でのトレーニング場で競技力向上に努めオリンピックを迎えることになる。

今こそ理念に原点回帰を

文・川本 峰男

印象に残ったオリンピック

何といっても、第18回東京オリンピックです。父の仕事柄、家の中すべてがオリンピック一色になり、当時小学校2年生の私にとっては、毎日がお祭りでした。右の写真は、公式ポスターと共に父と母と一緒に撮っていただいたものです。父は日頃、厳しい言葉で評論活動をしておりましたが、出来上がった公式ポスターを見るその顔は、本当に嬉しそうでした。混迷する現在の状況を父であつたらどのようにコメントするか、是非とも聞いてみたいものです。



川本 峰男(かわもと・みねお)

1956(昭31)年、東京都港区生まれ。79年、明治学院大学経済学部卒業後、(株)後楽園スタジアム(現(株)東京ドーム)入社。スポーツレジャービジネス全般に携わり、東京ドームホテル取締役、東京ドームプロパティ管理部長などを歴任。2020年3月、41年間にわたる会社員生活を終える。故父川本信正は戦前(1936年)オリンピックを五輪と造語したこと

で知られ、戦後はフリーのスポーツ評論家として主にアマチュアスポーツ、オリンピックを中心に評論活動を展開した

東京大会は二つ

「起きろ!! 晴れたぞ、見事な青空だ!!」

1964年10月10日、東京オリンピック開会式の朝。前夜の激しかった雨が嘘のようなその晴天に、父が喜びに満ちて発した大きな声を、今でもはきつきりと覚えている。

軽やかな「オリンピック・マーチ」と共に始まった入場行進。自宅の庭から見上げれば、澄み切った秋の青い空の中に、ブルーインパルスによって描かれた五つの輪があつた。

当時小学校2年生であつた幼い私は、明らかにいつもの日常と違うその時を迎え、これから何かとても楽しいことが始まるのではないかとという予感に自然に胸が高鳴っていた。

あれから、57年。コロナ禍での東京オリンピックの開催に、国内を二分する論争が続いている中で本稿を執筆している。

読者に本稿を読んでいただく頃、再びの東京は、オリンピックの歴史にどのような頁を書き加えているのであろうか。

オリンピックを五輪と造語したスポーツ評論家であり、筆者の父でもある川本信正は生前その著書(注)の中で、

「オリンピック運動(オリンピックムーブメント)は全地球的な平和運動である。このように世界中の関心を集める永続的な平和運動は、他に全く例を見ない」と明言している。

父はこうしたオリンピックムーブメントを実現する為に、4年に一回開催される「オリンピック競技大会」は、相互理解の上に立った平和と友好の祭典でなければならないという強い信念を持っていた。そして父はそんなオリンピックを心から愛していた。だからこそ、その理念を阻害するような、国威発揚を意図する過激なナショナリズムや政治の介入、

過剰な商業主義の浸食に対して常に厳しい批判の目を向けた。

それは単にオリンピックの理念を脅かすだけでなく、参加する選手を含め、スポーツを愛する多くの人々の人間性が政治や商業主義に傷つけられてはならないという深い思いがあったからである。

幻のモスクワと短い言葉

そんな父の思いを踏みにじる出来事があった。

1980年に開催されたモスクワオリンピック。ボイコットの選択をした日本にとって、まさにそれは幻のオリンピックとなった。オリンピック開催の前にした、その年のJOC(日本オリンピック委員会)の臨時総会に、当時JOC委員として出席していた父は、「モスクワ五輪参加」の論陣を張った。そこには、オリンピックに政治を絶対介入させてはならないという揺るぎない父の信念があった。

しかし結果的にその思いを果たすことが出来な

かった。

父にとってJOCが下した結論は、オリンピックの理念に反する堪えがたい背信行為であった。

当日帰宅した父は、疲労困憊した様子で「JOCを辞めるよ」という言葉を漏らした。

その短い言葉には、オリンピックの理念をなぜ理解してもらえないのかという口惜しさと政治が土足でオリンピックに踏み込んできたことに対する怒りが滲んでいた。普段は朗らかで笑顔も絶やさない父であったが、その時見せた無力感も漂わせた苦渋に満ちた表情は今でも忘れることはできない。

理念と意義と問いかけ

本来、五輪の旗の下に、国境を越え多くの選手、そして市民が世界中から集うことが出来た喜びを分かち合う祝祭の場であるはずのオリンピック。そして、そこには、その祝祭を通じて世界の友好と平和な社会を構築するという崇高な理念が掲げられてい

るはずである。

そう考えると、祝祭空間とは程遠いパндеミック下の東京で、そして祝祭することを禁じられたオリンピックを開催する意義は一体何だったのか、やはりどうしても疑問を感じざるを得ない。

いつしかオリンピックはその理念から大きく逸脱し、その意義は忘れられ、政治的な意図と五輪マネーの呪縛の中で身動きが取れなくなってしまうのではないか。

勝利至上主義がもたらす国家間によるメダル獲得競争、そしてその勝者たる選手の商品化。それは時として「ドーピング」のような不正行為さえ生み出す土壌となつている。

現状のオリンピックは余りにも多くの不健全な問題を抱えている。

図らずも「2020東京オリンピック」は、今までになく多くの人々に「オリンピックとは何か……」

という根源的な問いを投げかけることとなった。過去、これほどオリンピックの価値が問われたことがあつたであろうか。しかし、それは決して無駄な問いかけではない。多くの人々が、理想のオリンピックを考える好機ともいえる。

オリンピックは決して非難されるイベントではない。スポーツを通じて自らの可能性に挑戦し、培ってきたその技と力を極限まで開花させることは、人間として素晴らしい価値のある文化そのものではないか。

オリンピック本来の姿を、スポーツを愛する人々の手に取り戻さねばならない。

その為には、人間の尊厳を高め平和な社会を実現するという普遍的な価値を高らかに謳い上げているオリンピックの原点に今一度立ち返ることこそが必要ではないか。

それこそが、「人類が生存する限り、崇高な平和の理念を追求するオリンピックムーブメントはいつま

でも永遠に、オリンピックの聖火と共に継承されてゆくだろう」という父が願ってやまなかつた思いを実現する道ではないかと考えている。

(注) 川本信正編『オリンピックの事典』(三省堂) 1984年



多様性をもたらす『黒船』

文・溝口 紀子

印象に残ったオリンピック

1936年ベルリン大会

戦前、ヒットラーの全体主義、優生主義が蔓延する中、五輪がプロパガンダに利用された大会。その一方でアスリートたちは超人的な記録、パフォーマンスで無言の抗議をした。



溝口 紀子(みぞぐち・のりこ)

1971(昭和46)年、静岡県磐田市生まれ。小学4年で柔道を始める。92年バルセロナ五輪女子52kg級で銀メダルを獲得。96年アトランタ五輪女子56kg級に出場。2002年、フランススポーツ省ナショナル柔道コーチとして、04年アテネ五輪に参加(上の写真はその時のもの)。主著に『性と柔——女子柔道史から問う』(河出書房新社)『日本の柔道 フランスのJUDO』(高文研)。現在、日本女子体育大学大学院教授、スポーツ社会学者、公営社団法人袋井市スポーツ協会会長

混迷と象徴

コロナ禍の影響を受け、開催直前まで二転三転した東京2020。とりわけ、2021年2月3日のJOC(日本オリンピック委員会)臨時評議員会における、オリンピック・パラリンピック組織委員会前会長森喜朗氏の「女性には競争意識が強い」「女性が多くなると入っている理事会の会議は時間がかかる」「女性の理事を増やしていく場合は、発言時間をある程度、規制をしないとなかなか終わらない」「組織委員会に女性には7人くらいいますが、みなさん、わきまえておられて」などの女性蔑視発言が批判を受け、会長職を辞任をしたことは、混迷した東京2020を象徴する出来事であったのではないだろうか。

混迷した理由は、何と言っても新型コロナウイルス感染症の影響である。日本中で五輪開催反対という声が日増しに大きくなったのは、コロナで国民が

分断されてしまったからではないだろうか。とりわけコロナ禍になり、女性の自殺率が急激に高くなった。女性が7割近くを占めるともいわれる非正規雇用の人たちがコロナで職を失い、自己責任では這い上がれないような貧困に追い込まれた。それまで女性たちはいつも頑張つて頑張つて、「わきまえて」きたのに、経済的な格差は開く一方の中で、森氏の女性蔑視発言は、女性のみならず格差に喘ぐ男性たちも動かした。これまでわきまえてきた女たちとわきまえてきた男たちの声なき声が一気に大きく聞こえてきた。

空気と黒船

近年世界ではMeToo運動が広く支持され、五輪憲章にもジェンダー平等が織り込まれている。加えてLGBTQなどセクシュアルマイノリティの多様性も大事にしているというのが世界の潮流である。その中で、五輪開催地の組織委員長的女性蔑視発言は、

世界中から大きな批判を浴びることになった。

IOC（国際オリンピック委員会）バッハ会長も、結局森氏をかばうことはできなかった。森氏は、オリンピック・パラリンピックの組織委員会の会長になった時点で、国際基準である五輪憲章の旗振り役にならなければならなかったのに、国内の誰もが目に見てきたわけである。森氏のことだけでなく、私も含め、女性蔑視について無意識に看過していた空気が日本にはあった。森氏の辞任によって、日本でも女性蔑視発言は一発レッドカードなのだという世界の常識が一気に突きつけられた。

つまり、五輪を迎えるというのは黒船がやってくるということではないだろうか。海外からは選手だけでなく、新しい考え方も思想も日本に持ち込まれる。最新のスポーツ施設や箱モノを整えることが開催準備ではない。むしろ今回は海外からの情報や思想を受け入れる準備が不足していたと言わざるを得ない。

「より速く、より高く、より強く」からの脱成長

今回、パンデミック下で開催した五輪で、新たな様式となった「無観客」。これまでの近代五輪から大きく変化したのは、スポーツを「する」アスリートだけでなく、「見る」観客、「支える」ボランティア・スタッフのあり方である。

観客、ボランティアとして支えてくれる人たちも、五輪に出場する選手と変わらず大切であるという認識が、近年涵養^{かんよう}されてきた。しかし今回、前述の森発言以降、ボランティアの辞退が相次いだ。さらに、コロナ禍で感染拡大の不安が募る中、かつてないほど五輪開催に対して否定的な意見が充満し、選手やボランティアなど関係者たちは、進むも地獄、退くも地獄であった。

五輪中止を望む世論は一時は8割に達した。五輪後に総選挙があり、五輪を開催するか否かは、五輪を成功させて支持率を上げたい政府側と、五輪を中

止させて世論を味方につけたいアンチ政府側両者の競争の具になってしまった。そして強行開催した政府とIOC、組織委員会への反発が、選手たちに向けられてしまった。1980年のモスクワ五輪 бойкотの時のようにオリンピックに政治が介入し、大きな圧力が選手たちを苦しめる五輪となってしまった。

そうなった責任の一端はIOCにあると私は考える。一連の騒動を振り返ってみても、IOCの存在が見えない。首都東京開催であるからか、本来IOCがやるべきようなことを組織委員会がしていて、IOCからの発信、プレゼンスが見えない。どんどんIOCの存在、発言が小さくなっていることにオリンピックとして危惧している。

なぜ山下泰裕IOC会長は四者会議（IOC会長、組織委員会会長、東京都知事、五輪担当大臣の四者）に呼ばれないのか。

本来は開催国のオリンピック委員会であるIOC

会長が加わって五者会議になるべきはないだろうか。言い換えれば、これまでの五輪とは比べ物にならないほど政府の介入が強くなっていることを感じる。

オリンピックのモットーは、「より速く (Citius)、より高く (Altius)、より強く (Fortius)」であり、オリンピック精神に基づく研鑽^{けんさん}を呼びかけたものである。それは、アスリートに向けられたものであるが、一方で近代オリンピックの歩みと重なる20世紀からの経済成長もまた「より速く、より高く、より強く」を求めた点で両者は軌を一にする。IOCは、開催候補都市や国に対して、「国際社会における地位向上」、「経済効果」、「市民へのスポーツ振興と普及」など「開催による効果」を謳い呼びかけている。経済という国力もまた「より速く、より高く、より強く」という精神になぞらえることができる。IOCはスポンサービジネス、ライセンスビジネスなどのスポーツを使ったビジネススキーム（鍊金術）を駆使し巨大化してきた。

東京2020は、ほとんどの競技が無観客で行われた。コロナ禍により生活様式が大きく変わったことで生活や社会の豊かき、経済的な富を追うのではなく、ウェルビーイング (well-being 身体的・精神的・社会的に良好な状態 日本WHO協会…訳) の増大をはかうとする脱成長的な考え方が求められている。オリンピックが平和の祭典として国民を置き去りにしないイベントであるためにも、これまでの収益増大以上に、ウェルビーイングや多様性をより追求する必要がある。パンデミック下の無観客大会となった2020東京大会の功績は、これまでの五輪を見直す機会となったことである。

今後は、「より広く (多樣的に)、より (コストを) 低く、よりやさしく」なるようなオリンピックのあり方が問われているのではないだろうか。

自らのルーツをありのままに誇る

文・木村 元彦

印象に残ったオリンピック

1964年東京大会

写真は東京五輪を語るオシム氏(右)と筆者(左)



木村 元彦(きむら・ゆきひこ)

1962(昭和37)年、愛知県生まれ。ジャーナリスト、ノンフィクションライター。アジア、東欧などの民族問題を中心に取材・執筆活動を展開。著書に『無冠、されど至強 東京朝鮮高校サッカー部と金明植の時代』(ころから)『終わらぬ「民族浄化」セルビア・モンテネグロ』(集英社新書)など。『オシムの言葉 フィールドの向こうに人生が見える』(集英社インターナショナル)で第16回ミズノスポーツライター賞、『徳は孤ならず 日本サッカーの育将 今西和男』(集英社)で第7回広島本大賞ノンフィクション部門を受賞

オリンピックの根本原則第六条

「このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会的な出身、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない」

理想のオリンピックと大上段から語らずとも、このチャーター(憲章)を実現させるだけで十分である。

少なからずそれを希求して成功した体験が日本人にはある。言うまでも無く、1964年の東京五輪である。筆者は当時、物心もつかない幼児であったが、当時出された書籍や映像、そして何よりTOKYO 1964を体感した人々が、記憶をさらって語られるオーラルヒストリーから、その素晴らしさを感じた。

あのシーンに筆が走った

読売新聞社会部の名物記者であった本田靖春が描写した閉会式のシーンは、今読んでも心を揺さぶられる。国立競技場になだれを打つように選手が歓声をあげて次々に入場し、どこの国旗の前だろうが、お構いなし集まって、一種のカオス状態になるのだが、管理も秩序も排したそれが極めてあたたく、人種、民族、宗教を越えてひとつになったというあのシーン。少し長いが名文に敬意を表して引用する。

「東も西も、南も北も、ここにはない。平和ということばがあった。友情ということばがあった。でも、わたしたちは、それらをことばの上でしか知らなかった。しかし、いま、目の前に、平和が、友情が、ことばとしてではなく、現実の姿としてある。『世界は一つ』と聞かされてきたわたしたち。そのことばは、あまりにも美しい響きのゆえに、かえってそのウラにある大きな虚偽を隠しているのではないか――

としか、受け取れなかった。しかし、いまわたしたちの前に、すばらしい光景が展開されている。(中略)

東京オリンピックは、本当に大成功だった」

驚くべきことに国立競技場のスタンドにいた当時入社9年目31歳の本田記者は、この記事を早版に間に合わせるためにメモも取らずに光景を目で追いながら、一気に口述で吹き込んだのだ。

感動が筆を走らせるということが確かにある。生涯一記者、カネや権力に一切まつろわぬ「拗^ずね者」としてその生涯を閉じた本田が「本当に大成功だった」と惜しめない称賛を捧げた大会。それが1964年東京五輪だった。

おばあさんの梨

その楽しさは選手の側からも多数の証言があがっている。サッカーのユーゴスラビア代表として出場した元日本代表監督のイビツァ・オシムは、2年前に筆者が彼の住まいのあるオーストリアのグラーツ

で行ったインタビューの中でこんなふうに語っていた。「オリンピックの方がW杯よりも国際的で友好的な大会で、人間臭い交流の場所だ。W杯には、32カ国しか出場できないし、その中心はヨーロッパや南米のサッカー強国に限られる。しかし、オリンピックは、たとえ、国が内戦状態であつたとしても一人からでも個人参加ができる。1964年の東京選手村では、あらゆる国々の多様な民族が一堂に会した。そこでの出会いは私にとつても新しい世界として広がった」

オシムが親日家になつたのは、このときに選手村で借りた自転車で遠出をした際に千葉の農家で親切にされたことが、最初のきっかけと言われている。老婦がふるまってくれた冷やした梨の甘く爽やかな味が、それこそ今でも忘れられないという。

オシムが無名時代のこれこそがホスピタリティであらう。1964年東京大会開催時は10月、季節はスポーツの秋。米国の放送局の都合に合わせて猛暑

の7月に、それも北米のゴールデンタイムに無理やり試合時間を設定されることも無かつた。

理想のオリンピック。何のことはない。1964をもう一度、行えば良いのだ。どうすれば良いか。

まずはIOC（国際オリンピック委員会）と、その背後にある大手代理店をそれぞれ一度、解体する。利権の巢窟になる招致活動の監視。政治と商業主義とナショナリズムからの完全なる独立。

おそらく、これらの提案は他の書き手の方々もなされるであらう。私はあえて1964年に無かつたものの充実を提言したい。それは難民選手団である。リオデジャネイロ五輪で初めて結成されたこのチームは今年の東京五輪では、29人が参加している。リオでは参加したメンバーの10人中、2人がブラジルで難民として暮らしている選手であつたが、恥ずべきことに、東京ではこの中に日本が受け入れた選手が1人もいない。この国の難民行政を見れば一目瞭然であるが、2020年に日本が難民として受け入

れたのはたったの47人である。今年3月にはスリランカ人女性のウィシユマさんが入管施設に収容中に体調不良を訴えたにも拘わらず、治療を施そうとせず死亡に至らした事件が発生する。「外国人は煮て食おうと焼いて食おうと自由」という国において、東京五輪の難民選手団は強烈な欺瞞ぎまんの象徴となつてゐる。冒頭の五輪根本原則に照らせば到底、開催資格は無い。

であればこそ、理想の五輪のひとつの基準として開催国に生活する難民選手団の存在をクロースアップしても良いだろう。それは一世のみならず、二世、三世も自身の意志によつて選択を可能とする。今年の東京五輪にはシリア代表と難民選手団代表に分かれて参加したマソ兄弟がいるが、二人はドイツで共に生活している。いかにその国が寛容に難民を受け入れてきたかの自然なアナウンスとなる。ヨーロッパのサッカー界は移民・難民の末裔で成立していると言つても過言ではない。

ルーツと誇り

かつて日本においても政治難民という境遇ながら、不可視にされてきた選手が多々いる。1960年代後半から70年代にかけて幻の日本一と言われた在日朝鮮蹴球団のエースで、釜本邦茂と双壁と言われた金希鏡という在日コリアンの選手がいた。金は1945年に済州島に生まれ、3歳のときに島民の約4分の1が虐殺されるという済州島4・3事件が起こり、両親と日本に逃れることになった。いわば未成年難民であるが、彼のような選手を救い上げる制度が整っていればどれほど芳醇なスポーツシーンが日本で構築出来ていたことか。

理想の五輪は、国別対抗の軛くびきから解放され、選手が自らのルーツをありのまま誇つて競技に邁進する。それこそが死語になりかけている「平和の祭典」への回帰になると思うのだ。

根本問題を解決して素晴らしさを残す方法

文・玉木 正之

印象に残ったオリンピック

1964年東京大会

1964年、実家は京都の祇園町で電気店をやっていました。親父がカラーテレビを手に入れ、近所の人々が30人ほど詰めかけてぎゅうぎゅう詰めで、開会式を見つめました。カメルーンの行進のときにアナウンサーが「たった二人の行進、健気であります」と言ったんです。僕は小学6年で意味が分からず「お父ちゃん、ケナゲって何？」と振り返ったら、大人達は笑顔なのに頬にはボロボロ涙が流れてました。



平成4年(1992年)に来日したレニ・リーフェンシュタール(1936年ベルリン五輪記録映画監督)と市川崑(1964年東京五輪記録映画監督)の対談を司会



玉木 正之(たまき まさゆき)

1952(昭27)年、京都市生まれ。東京大学教養学部中退。大学在学中より新聞雑誌に原稿を執筆。27歳の頃、日本で初めて「スポーツライター」という肩書きを名乗る。現在の肩書きは「スポーツ文化評論家」。主著に『今こそ「スポーツとは何か？」を考えてみよう』(春陽堂書店)『スポーツとは何か』(講談社新書)『マラーの交響曲』(同)『スポーツ解体新書』(朝日文庫)など。訳書にロバート・ホワイティング『ふたつのオリンピック』(KADOKAWA)など

オリンピックの「根本問題」は多くの人が指摘するとおり「商業化」と「肥大化(巨大化)」である。

巨大なグローバル企業をスポンサーとして巨額のカネ(協賛金)を集め、アメリカのテレビ局を筆頭に世界中の放送局からさらに巨額の放送権料を集め、「商業化」によつて集めたカネでオリンピックはますます「肥大化」し、「肥大化」することさらに巨額のカネを集める必要が生じ、いつそう「商業化」が進む。そうして「商業化」し「肥大化」を自己拡大し続けてきたオリンピックは、地球が感染症のパンデミック世界的拡大に見舞われても、スポンサー企業や放送局のために中止することもできなくなってしまう。

また選手にとっては最悪のコンディションである猛暑の真夏に競技をさせられたり(春や秋は多くのプロスポーツ大会が目白押しですからね)、午前中に決勝のレースや試合を行う(時差の関係で最も多額の放送権料を出しているアメリカのテレビ局のプライムタイムに放送を行うため)など、「アスリート・

ファースト」も不可能な状態に陥ってしまった。

最近読んだある本には、《オリンピックをスポーツと言うのは（犯罪人などを相手に目つぶしに使う）唐辛子催涙スプレーを食料品だと言うに等しい》とまで書いてあった。では、「オリンピックをスポーツに戻す」には、どうすれば良いのか？「商業化」と「肥大化」を止めるには、どうすれば良いのか？

これまた最近読んだある本で、《原因は結果に内在している》という表現と出逢った。

なるほど。「商業化」と「肥大化」という「結果」のなかに「内在」している「原因」を見つけなければ「商業化」と「肥大化」を止めることはできないし、もちろんそれらを廃することもできない。

とはいえ、それはさほど難しいことではない。

オリンピックの「商業化」は1984年の第23回ロサンゼルス大会から始まったと言われている。2大会前の第21回モントリオール大会がオイル・ショックに見舞われ、現在の物価に換算すると1兆

円以上の赤字を計上。続く第22回モスクワ大会はソビエト連邦（現ロシア）のアフガニスタン侵攻によって西側諸国がボイコット。さらにモスクワ大会後の五輪招致を表明していたパレビ王朝のイランにイスラム革命が勃発（1978年）。五輪開催に立候補する都市がなくなり、IOC（国際オリンピック委員会）は、過去（1932年）に一度五輪開催経験のあるロサンゼルスに開催を要請。ロサンゼルス市は税金を1セントも使わないことを条件に開催を引き受けたのだった。

そこで組織委員会会長となった若きピーター・ユベロス（43歳で全米第2位となる旅行会社を創業した辣腕企業家）は、五輪会場に広告看板の使用許可を取りつけ、スポンサー料や放送権料を引きあげ、聖火リレーも希望者に有料で販売するなどの「商業化」を断行。その結果、見事に税金を1セントも使わないどころかオリンピック大会の黒字運営に成功。五輪開催によって全米のスポーツ団体や福祉団体に

多額の寄付まで行つたのだった。

このときの黒字の要因は収入の増加以上に支出の削減にあつた（新しい施設をほとんど造らなかつた）が、ユベロスの金集めの方法（商業化）をそっくりそのままIOCが踏襲。以来IOCは巨額の収入を得ることに成功し、オリンピックの「商業化」と「肥大化」に邁進するようになったのだった。

IOCは、それによって得たカネで発展途上国のスポーツ団体や人気・認知度の低いスポーツ競技のIF（国際競技連盟）に対する援助を行い、若者のスポーツ振興（15〜18歳を対象としたユース・オリンピックの開催）にも貢献しているという。が、同時にIOCの下部組織として数多くの財団（オリンピック財団、オリンピック文化遺産財団など）を設立。その財団の下部組織に多くの株式会社（子会社、孫会社）も設立した。それらの財団や会社の存在は原則非公開で、バツハ会長を初めIOC幹部が社長や役員を（もちろん有給で）務めているという。つ

まり「商業化」の構造と「肥大化」の必然性は、IOC内部に存在（内在）しているのだ。

ならば「商業化」と「肥大化」を食い止め、「オリンピックをスポーツ（の大会）にする」には、その原因となつているIOCそのものを解体するほかない。と同時に、現在の「肥大化」したオリンピックも、いったん廃止する必要があるだろう。

古代オリンピックは紀元前776年から紀元393年まで千年以上続いた。近代オリンピックは1886年から202X年まで、まだ100数十年程度だが、時代のスピード、技術の進歩や社会の変化の速さを較べるなら、近代オリンピックも古代オリンピックと肩を並べるほどの長きにわたつて継続し、一つの役割を果たし終えたとも言えよう。

そのときオリンピックがなくなつて悲しいとか、オリンピックの火が消えて淋しい……と悲しみ嘆く人が、世界中でどれくらいいるだろうか？

オリンピックで、いろいろと事業や商売をしてい

る人は、もちろんオリンピックがなくなれば、こんな悲しく淋しいことはないと感じに訴えるだろう。が、騙されてはいけない。彼らはオリンピックで金儲けをし、オリンピックを「商業化」と「肥大化」に導き、「オリンピックをスポーツでなくす」ことに手を貸す（手を貸した）人たちののだ。

スポーツを楽しみたいなら、ワールドカップも世界選手権もある。メジャーリーグもあれば、NBA、NFL、NHL、プレミアリーグ、ブンデスリーガ、ユーロ・サッカー、プロ野球、Jリーグ、Bリーグ、大相撲……と、現在スポーツは世界中で目白押しに存在する。それでもオリンピックという少々美しい響きのある言葉が消えるのは切ないと思う人が世界中に大勢いて、その声が高まるというのなら、4年に1度の「オリンピック・イヤー」を設け、その年に行われる世界選手権やワールドカップにオリンピックの名前を冠し、五輪のマークを用い、さらに文化プログラムも用意し、世界の全国各地で広範

囲に1年中行われる地球規模の「第X回近代オリンピック（各種）競技大会」を盛りあげればいい。

今年にはオリンピック・イヤーだから戦争行為はできるだけ避けて、世界中でスポーツを楽しもうという「オリンピック大会の認定と援助」をするだけのIOCは、国連のユネスコ（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization＝国連教育科学文化機関）の一組織として、各国のGDPに合わせた拠出金で運営（商業主義を廃して各競技団体を支援）すればいい。

いや、各国の拠出金も不要かもしれない。現在のIOCの資産や、下部組織の財団、株式会社の総資産をまとめて新しい財団を創設すれば、各競技の世界大会を4年に1度オリンピックと認定して開催することくらいワケないことも……。

〈参考文献：ジュールズ・ボイコフ『オリンピックに反対する側の論理』（作品社）／後藤逸郎『オリンピック・マネー』（文春新書）／小川勝『オリンピックと商業主義』（集英社新書）／『現代スポーツ評論44』（創文企画）〉

夏冬の競技数は正、究極の理想は 国籍の壁も越えたオリパラ融合

文・田村 崇仁

印象に残ったオリンピック

2008年北京大会

陸上男子100mでウサイン・ボルトの世界新記録に驚愕。一夜で人生が変わる瞬間を目の当たりにしました。事前取材で訪問したジャマイカでまだ無名だったボルトにインタビューできた時間は、今思えば本当に幸運で感慨深いです。



2016年、リオ五輪開幕前にサンパダンサーと踊って盛り上げるウサイン・ボルト



2016年、国際陸連の年間表彰式（モナコ）でボルトと記念撮影する筆者



田村 崇仁（たむら・たかひと）

1973（昭和48）年、群馬県高崎市生まれ。高崎高校—早稲田大学卒。96年、共同通信社入社。2002年W杯までサッカー担当、その後プロ野球担当（近鉄、阪神）、日本オリンピック委員会（JOC）担当を経て、13年からロンドン支局駐在。国際オリンピック委員会（IOC）をはじめ、テニスやゴルフなど欧州スポーツ全般をカバーした。現在は東京五輪・パラリンピック担当デスク。柔道女子代表の暴力・パワーハラスメント問題取材班（代表）で日本新聞協会賞受賞

近代五輪を提唱したクーベルタン男爵は1920年代、生前の演説で「もし輪廻というものが存在し、100年後にこの世に戻ってきたならば、現世で苦勞して築いたもの（五輪）を私は破壊することだろう」との言葉を残している。スポーツと国際交流を通じて平和な社会の推進を目指す理想と、単なるメダル争いの場になってしまった現実の乖離を直視し、未来を予言していたのかもしれない。

国際オリンピック委員会（IOC）のバッハ会長に言わせれば、五輪が持つ最大の魅力は「選手村で暮らすかけがえのない体験」だ。新型コロナウイルスの影響で史上初の延期となった東京五輪・パラリンピックは、一つ屋根の下で国際交流を育む選手村の生活も感染対策で限定的となり、世界各地から集まった観客がピンバッジを交換する風物詩も消滅。コスト増大やジェンダー問題まで負のイメージが噴出し「大義なき五輪」の現実を浮き彫りにした。

100年後も「平和の祭典」は続くのか――。

スイス・ローザンヌ大学でIOCと五輪の歴史を長年研究するジャン・ルー・シャプレ名誉教授に尋ねると、希望的観測を込めた回答が返ってきた。「紀元前8世紀から1200年近くも続いた古代五輪からの理念は生き続ける」と。さらに「近代五輪は東京で深刻なダメージを受けたが、既存施設をフル活用した簡素化にシフトし、100年後も時代の変化に合わせて形を変えながら発展していく」と強調した。

大会の形を変える改革はもちろん実現に困難さを伴うが、究極の理想として肥大化抑止へ夏季と冬季の競技数バランスを是正した上で、国籍や障害の壁も越えた五輪とパラ融合の祭典を提言したい。

複数競技を冬季移行の「秘策」

まずは飽和状態の夏季五輪から冬季五輪に複数の競技を移行し、新陳代謝を図る大胆なプランだ。これは猪谷千春IOC名誉委員が提言した「秘策」で

もあるが、史上最多33競技を実施した東京五輪に象徴される巨大化した夏の祭典に比べ、冬は7競技。五輪憲章で冬季は「雪や氷の上で行われる競技」とも明文化され、制度上のハードルは高いが、大会規模がアンバランスな課題を是正すれば、固定観念に縛られた五輪に風穴を開ける可能性がある。

例えば屋内で実施できるバスケットボールやハンドボール、フェンシングなど冬季にも移行可能な競技の候補はいくつかある。屋外競技でもサッカーなどは夏の炎天下で実施するより、冬季の方がプレーしやすいだろう。だが最大の壁はIOCに巨額の放送権料を支払うテレビ局優先の商業主義。欧米の人氣スポーツと重なる秋のシーズンを避け、夏季五輪を真夏に行う背景には米テレビ局側の意向もある。猪谷氏の提言がこれまで「時期尚早」として進まなかった理由には、夏季大会の「ブランド」を重視する競技団体の強硬な抵抗もあったようだ。

ただ転換期を迎えた五輪は、夏と冬の壁を越えた

選択肢も一考に値する。充実したコンテンツが分散する魅力はビジネス的にもメリットがあるのではない。IOCのバツハ会長は五輪招致改革で複数の都市や国での共催を容認しており、冬季五輪を開催する国や都市でも夏季大会の競技を取り入れるのは現実的に可能はずだ。東京五輪で野球・ソフトボールや空手など開催都市枠の追加競技を初めて認めた「バツハ改革」の次の一手になるかもしれない。

ユース五輪で多国籍チームの新機軸

大会の形を変える新機軸として興味深いのは、未来モデルの五輪像を示す「多国籍チーム」だ。五輪に先駆けて新たなアイデアを試す「実験場」と位置付けられるユース五輪では個人戦で通常のメダル争いを実施しつつ、国籍を超えた選手とチームを組む「多国籍」の団体戦も柔道やバドミントンなど各競技で導入されている。2018年の第3回夏季ユース五輪（ブエノスアイレス）で初採用されたブレイク

ダンス混合団体では河合来夢がベトナムの男子選手と金メダルに輝き、個人との2冠を達成。即席で頭をひねって振り付けを考え、息の合った踊りで「普段はできないことを楽しめた」と笑顔を見せた。

ユース五輪は若者のスポーツ離れに危機感を持ったIOCのロゲ前会長が2010年に創設し、原則15〜18歳対象で五輪精神の教育や国際交流が大きなテーマの一つ。IOCは五輪憲章で「五輪は選手間の競争であり、国家間の競争ではない」と定めるが、国別対抗戦の色彩が濃いのが現実だ。こうした多国籍チームの取り組みは、ともすればメダル至上主義の五輪に新たな風を吹き込み、真の国際交流という意味で選手間の壁を取り払い期待感がある。

未来の五輪像とは

そして将来的には五輪とパラリンピックを統合して一つの祭典にできないかを考察したい。奇想天外の発想でむしろパラの独自性が希薄になるとの見方

もあるだろうが、陸上男子1000mで義足ランナーとウサイン・ボルト（ジャマイカ）が同じレースで直接対決する、ということではない。「車いすの部」や「視覚障害」など種目を分け、オリパラ選手がそれぞれ個別に同一大会で競演する考え方だ。

実際、4年に1度の英連邦大会では約50カ国・地域が参加して陸上や水泳の日程にパラ種目が組み込まれ、同時開催されている例もある。最近では車いすバスケットボールの日本選手権で競技力向上や裾野拡大へ健常者の選手登録も認められ、新たな潮流も生まれてきた。頭脳球技のボッチャは脳性まひなど重度の障がい者と健常者が真剣勝負できる唯一のスポーツともいわれる。試験的なトライからでもいい。障がい者と健常者が壁を越え、同じ競技で真剣勝負できる場が実現すれば、コロナ禍で不要不急ともされたスポーツの新たな価値が共有される契機になるう。

課題はスポーツの根幹を成す公平性。パラのトッ

プ選手で陸上男子走り幅跳びの義足ジャンパー、マルクス・レーム（ドイツ）のように「五輪を共生社会の象徴として活用したい」とIOCに東京五輪への特例参加を要望するケースも出てきたが、義足が有利に働いていないかの科学的証明が必要となる。

クーベルタンが考えたオリンピックズの原点は、スポーツを通じた人間の理想の実現と平和への道を願う教育改革。IOCは最近、身体運動を伴いながらオンラインで競う「バーチャル（仮想）スポーツ」の将来的な五輪採用を視野にゲーム業界に接近して「新たなスポーツの形」を模索するが、人と人をつなぐ力を持つスポーツの原点は忘れるべきでない。メダルに挑む真剣勝負と、国際交流を図る多国籍チームを融合させ、オリパラの壁も越えた大会。大会規模や日程をどう整理するのか難題は残るものの、誰もが参加できる「ユニバーサルスポーツ」の発展は五輪が掲げる「多様性」や「共生社会」の理念につながる。未来の五輪像を変えるかもしれない。

アスリートの活躍と市民の交流こそ理想のオリンピック

文・真田 久

印象に残ったオリンピック

1998年長野大会

理由：大会後も継承された教育プログラム「一校一国運動」が始められたから。右の写真は、2014ソチ五輪の折に「一校一国運動」で日本の手毬を作るソチ市内の小学生



真田 久(さなだ・ひさし)

1955(昭30)年、東京都大田区生まれ。筑波大学大学院体育研究科修了。博士(人間科学)。専門はスポーツ人類学。著書に『19世紀のオリンピア競技祭』(明和出版)『嘉納治五郎 オリンピックを日本に呼んだ日本人』(潮文庫)『逆らわずして勝つ! 嘉納治五郎物語』(PHP研究所)など。現在、筑波大学特命教授、神田外語大学客員教授、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会参与、同組織委員会文化・教育委員会委員、日本オリンピック・アカデミー副会長

私の考える理想のオリンピックは、大会でアスリートのすばらしいパフォーマンスとフェアプレイの姿を見せてくれることと、競技場の外で、市民たちの国際交流が行われる、そんなオリンピックです。この両者が相まってこそ、良きレガシーとして継承されていくことと思います。前者のアスリートの姿は、どの大会においてもそのような場面は示されてきました。そうすると後者の国際交流が行われてこそ、理想のオリンピックということになります。その意味で私がまずあげるオリンピックは1998年に長野市などで開催された長野冬季オリンピックです。それは「一校一国運動」が展開されたからです。一校一国運動は長野市において、市内の小中学校、高校および特別支援学校が、大会への参加国を選んだ、その国の文化を学びながら、応援しようというものでした。長野市内の75校が大会参加国72カ国・地域を交流相手国に選んで交流が行われました。大会の基本理念に「子どもたちを主役にする」という

考えに着目した長野国際親善クラブ小出博治会長の提唱で1996年から開始されました。

大会前は、各学校で交流相手国の文化や歴史を調べることから始まり、やがて国内にいる交流相手国の人たちを招いて、あいさつ言葉を学んだり、人気のスポーツや料理について紹介してもらう一方、長野の生徒は相撲や書道を紹介するなどして交流が行われました。中には、生徒たちが交流相手国の学校に、手紙を送るなどの活動へと発展し、その国は実は内戦直後で、地雷の被害にあっている生徒がいることに気づきます。そこで児童会は地雷で怪我をした友人に義足を贈ろうと、募金活動が始まりました。

オリンピック・パラリンピック期間中には、選手村の入村式に参加して、交流相手国の国歌を母国語で歌い、競技を観戦して応援し、また選手団を学校に招いて交流会が行われました。

大会終了後も交流活動が続けた学校は多く、平和学習や環境学習などにも目が向けられていきまし

た。これらのプログラムは、国際理解や平和の尊さ、環境保全意識の向上など、オリンピックやパラリンピックの理念を生徒たちに理解させるのに大きく役立ったのです。またPTAや長野市の商工会議所など、市民を巻き込んだ運動へと発展したのです。

この運動を次期大会関係者が放っておくことはありませんでした。2002年のソルトレークシティ冬季大会の際にも、ユタ州の小中学校約600校で「One School One Country Program」として実施されたのです。ユタ州では、各学校が自分たちで交流相手国を選んだのですが、最も人気のあつた国は日本で25校が担当しました。私も交流の様子を見に行つたのですが、何と、長野大会で「一校一国運動」に参加した小学6年生が、高校1年生になっていて、ソルトレークシティまで出かけ、自主的に交流していたのです。「一校一国運動」は2006年のトリノ冬季大会でも、継続されました。

冬季大会ばかりではなく、2008年の北京大会

でも実施されています。応募した北京市の学校から200校が選拔され、「同心結」プログラムという名称で、「二校一国運動」が展開されました。日本を担当した北京市の小学生は、2007年に長野市を訪れ、歓迎を受けた後、椅子取りゲームや伝言ゲームなどで交流し、りんご園を訪問したりしました。

2014年のソチ冬季大会においても、「二校一国運動」が展開されました。表彰を受けた学校に日本を担当した学校があり、その学校をパラリンピックの最中に訪問したのですが、春休み中にも関わらず、多くの生徒と保護者が集まって歓迎してくれました。その生徒たちは、折り紙、手毬などを作り、俳句や柔道も学んでいました。日本の文化を学んだことで、いいことはありませんか、と尋ねたら、校長先生が、「国際感覚と寛容の心が身についた」と話してくれました。日本文化には自然や相手を思いやる心情がある、と言うのです。国際交流を通しての異文化理解は、どこの国の人たちにとっても有益なのだ

と感じました。その時の小学生の生徒さんから手毬をプレゼントされましたが、それは日本の国旗とロシアの国旗が五輪で繋がっているというデザインでした。(写真参照)

長野市では、現在でも「二校一国運動」を続けている小中学校が10数校あります。参加した生徒は、それを契機に国際協力や異文化理解に興味を持ち、国際関係やスポーツ、さらには教育の仕事に進んだ人たちも多いのです。

この「二校一国運動」は東京2020大会にも継承されています。東京都では、「世界友だちプロジェクト」として、一つの学校が5カ国の文化を学ぶことが行われています。東京都では2016年度から全ての公立学校で年35時間のオリンピック・パラリンピック教育が行われているので、世界に目を向けた子どもたちが育つていくことでしょう。

さらに、「二校一国運動」を自治体のレベルで行う取り組みも実施されています。それが「ホストタウ

ン」です。日本の自治体と東京2020大会に参加する国・地域と住民レベルで、スポーツや文化など多様な分野で交流することで、地域の活性化にも活かしていこうというもので、2015年度から始まりました。2021年4月末までで全国の自治体の3分の1に当たる528の自治体が184カ国・地域のホストタウンとして、長いところでは7年間、交流活動が行われています。交流の内容は、事前キャンプや、自治体のイベントや祭に招待して交流を行う、小中学校に選手を招待して、一緒にスポーツ活動を行う、などさまざまです。2020年度よりはコロナ禍の中で、対面での交流はできなくなりましたが、オンラインを通じて、交流相手国の国歌を学んで皆で合唱したり、エールを交換しあったりする活動が行われました。また交流相手国のナショナルコーチに、日本の生徒がオンラインで指導を受けることなどが行われた地域もあります。

7月、茨城県笠間市の聖火リレー出発式を見まし

たが、市はエチオピア、タイ、アメリカ、フランスなどのホストタウンになっていて、聖火リレーのスタートとなる公園で、交流相手国の料理を市民に味わってもらおうと提供していました。3年前にはエチオピアの陸上競技の選手と中学生が町内の中学校を訪問し、英語の授業や駅伝大会に参加して交流を深めたのです。市の担当者に伺うと、コロナ禍においては、オンラインでの交流が一部で行われましたが、大会後には、年末に行われる市のハーフマラソン大会に招待し、交流を続けるということです。

ホストタウンは、大会後も継続することが推奨されていて、コロナ禍を経験したからこそ、絆が深まった自治体も多いようです。そしてこのホストタウンはパリ2024大会でも、フランスで行われることが検討されています。そうすると、「一校一国運動」が、市民の交流プログラムとして発展的に世界に受け継がれていくことになります。日本発のムーブメントになることでしょう。

理想のオリンピックとは？

オリンピックのユートピアを考える

文・友添 秀則

印象に残ったオリンピック

オリンピックを研究対象とする中では、大会そのものよりも大会前後の調査が意味を持つことが多い。写真は北京大会の数年後、レガシー調査時にメイン会場となった愛称「鳥の巣」での一枚。まるで「つわものどもが夢の跡」をみているようだった。



友添 秀則(ともぞえ・ひでのり)

1956(昭31)年、大阪市生まれ。筑波大学大学院修了。(公財)日本学校体育研究連合会会長、日本スポーツ教育学会会長、スポーツ庁スポーツ審議会委員、(一社)大ススポーツ協会執行理事。専門はスポーツ教育学・スポーツ倫理学。近刊に『現代スポーツ評論44 オリンピックの価値を問う』(創文企画)『スポーツレガシーの探究』(ベースボール・マガジン社)など。香川大学教授、ニューヨーク州立大学客員教授、早稲田大学スポーツ科学学術院長などを歴任

学問としてのオリンピック研究

古代オリンピックは、古典学や歴史学のみならず、文明論や文化人類学にとって魅惑的な対象である。また、クーベルタン以降の近代オリンピックは、コロニアリズム(植民地主義)やポストコロニアル批評の視点からの考察、政治学や経済学、社会学、倫理学、地政学等々、学問領域のリストができるぐらい学的関心を満たしてくれる。実にオリンピックほど、学際的、横断的な研究にふさわしいものはない。言葉を換えて言えば、近現代オリンピックは豊饒な文化複合の産物なのである。しかし、残念なことに、学問の領域を自由に越境しようとするオリンピック研究は端緒についたばかりである。一方、スポーツの人文社会科学的な研究からのアプローチはいまだヤング・サイエンス(後発の学問)の域をでない。

あれほどスポーツ好きの英米人でさえ、スポーツを長らく真面目な研究対象とは考えなかった。キリ

スト教の影響でか、崇高な精神に対して肉の悦びをもたらずスポーツは知的な対象とはなりえなかった。牛の膀胱の争奪を集団で楽しむ、後のフットボールの原型が暗示するように、それらの遊びは下品で、ましてや真面目な学問の対象として扱われるものではないと考えられたフシがある。

オリンピックが展望にくい理由

筆者はおよそ40年前の学生時代、古代オリンピックが終焉を迎えたのは、八百長や勝敗を巡っての金銭のやり取りや不正が蔓延したからであると学んだ。言うまでもなく、古代オリンピックは紀元前776年に始まったと伝承されるが、当時疫病の蔓延に苦しみ、それを鎮めるにはギリシャの神、ゼウスに捧げる宗教的祭典を行うべしとの神託で始まったといわれる。だからこそ、古代オリンピックは、疫病で多くの人が死んでも、また27年間も続いたアテネとスパルタ間のペロポネソス戦争があつても、一度も

中止されることがなかった。というのも、オリンピックは、むしろそれらを神によって鎮めてもらうことを意図して行われるものだったからである。ついに392年、ローマのテオドシウス帝がキリスト教をローマ帝国の国教と定めたことで、異教のオリンピック(ゼウス)信仰を維持する祭典は終わった。

いま、その一端を示したが、オリンピックをめぐる研究は、古代のみならず、近現代オリンピックを学際的に深く掘り下げる考察を生まず、そのことが、これから向かうべきオリンピックの在り方への深い洞察や展望を描きにくくしている。

オリンピックは雑草である

「オリンピックは雑草である」と書き出せば、いささか不謹慎に過ぎるかもしれない。雑草は人に踏まれ風雨に耐え、ひどい過酷な環境でも強い生命力を発揮して、環境に適応し生き続ける。オリンピックもまた雑草の如くである。オリンピックこそ、過酷な

環境にも、また幾たびかの存続の危機をもしたたかに回避してきた。

近代オリンピックは、1896年にわずか14カ国、男子のみ241名で始まった。当初は万博の付属物であったが、2度の世界大戦による5度の中止や冷戦下の大会ボイコットなどを経てもなお、人類唯一のメガイベントとして進化した。その間、ロスの民営五輪の成功と商業主義に支えられたビジネス五輪の徹底がその進化に拍車をかけた。他方、巨大化した大会による巨額の財政負担、環境への負荷や治安等への問題が市民の招致反対運動を招いた。しかしIOCは素早く対応し、さらには「オリンピック・アジアエンダ2020」を採択した。また、ダイバーシティが叫ばれるとオリンピックズムに人権や平等をいち早く盛り込み、政治的にはもとより、多方面に柔軟さを示した。その生き様は、まさに雑草の如くである。

野にある雑草も花を咲かせる。先日故人となられ

た小林亜星氏の名曲に「野に咲く花のように」がある。ダ・カーポの軽やかな歌声は「野に咲く花のように」風に吹かれて 野に咲く花のように人を爽やかにして …中略… 時にはつらい人生も 雨のち曇りで また晴れる ♪と、野の花を歌う。

オリンピックは野に咲く花でもある。この花は人類が英知を集めて、人類だからこそ生み出した未完の文化装置である。この花は、時に人間がえも言えぬ美的なパフォーマンスを示したり、人類未踏の記録を打ち立てたり、敗者の苦悩に満ちた横顔に人生の深淵を垣間見せたりすることで、「時にはつらい人生も、雨のち曇りで、また晴れる」を人々にもたらす。そしてこの花は、冒頭に記したアカデミックな魅力などをはるかに凌駕して、人生の意味を直感的に教えてくれる。だが、残念なことに、この花を咲かせる文化装置は未完なのである。だからこそ、この未完の文化装置の未来予想図は書かれねばならない。

オリンピックのユートピアと未来予想図

帝国主義の始まりと共に、アマチュアリズムという身分規定の下、若きブルジョアエリートの人リネス（男らしさ）を伴った競争で、ナショナルリズムを鼓舞した近代オリンピックという文化装置も、覆い難い制度疲労が見てとれる。

それではオリンピックにどのようなユートピアを描くべきか。まずは、人類の大運動会の祭典にしてはどうか。その中に、現行のオリンピックはひとつのデイビジョンとして残すとしても、近代スポーツがその根幹に位置づけてきた意味での競争を伴わない、各民族、各文化に伝えられてきた運動文化を交流するデイビジョンも設ける意味はある。オープン参加による人類の大運動会という発想である。次に障害者と健常者が共に楽しめるユニバーサルスポーツのデイビジョンも必要である。オリとパラを分けるという発想も卒業していい。

年齢層をいくつかのカテゴリーに分けて、シニアから幼児を含んでレクリエーショナル・スポーツを中心としたいくつかのデイビジョンがあってもよい。もちろん国家単位ではなく、勝手連に代表される市民連合を一つの単位に楽しんでもよい。eスポーツはもちろん、自薦他薦の多様なスポーツ種目のデイビジョンもOKである。産業社会では何よりも大筋活動は重きを置かれる価値であったかもしれないが、人工知能によるシンギュラリティ（技術的特異点）が目前に迫る今、大筋活動を伴わないスポーツのデイビジョンも加えられるべきだ。禁欲的な真面目さから、バージョンアップされた「遊び」の心持ちが、新しいオリンピックの根幹に位置づく。新しいオリンピックの理念は何よりも大会のエンタメ化である。アテネの恒久開催と大会運営費はIOC加盟国のGDPに応じた応分の負担である。ユートピアを夢想に終わらせないためにも、新たな模索が求められる。

バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011

埼玉県新座市野火止8-16-32

株式会社東美物流

『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の冬号第53号は2021年12月

中旬刊行を予定しています。ご期待ください。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館で読めます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫

●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館
●港区芝・東京都人権プラザ図書館

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大

学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左

（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オ

リンピック・アカデミー名誉会長）／佐久間

昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッ

ポン放送取締役相談役）／永井憲一（法政大

学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工芸院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部 太田章研究室 気付

皆様、ご存じでしたか？

『スポーツゴジラ』が置かれている都営地下鉄（大江戸線、浅草線、三田線、新宿線）では、ラジオのAM放送を聴くことが可能です。緊急時の情報収集などに役立ちます。

スポーツゴジラ®

2021年9月6日発行

第1巻第52号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

平塚貴大・山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 株式会社 美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401